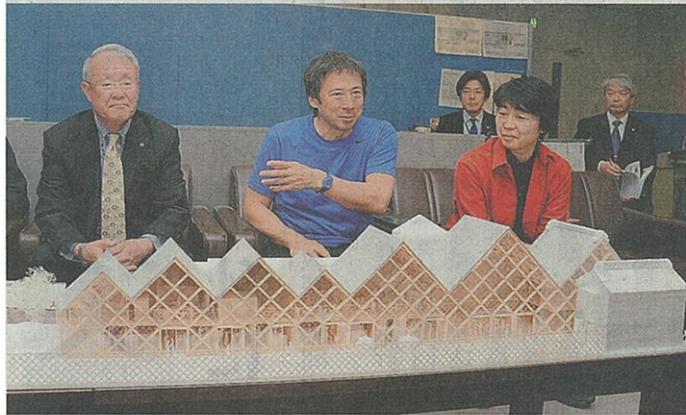


製糸場「トラス」採用

富岡商工会議所17年移転

新商工会館の模型を前に記者会見する手塚貴晴さん(手前中央)、由比さん(同右)ら

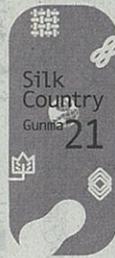


富岡商工会議所17年移転

製糸場「トラス」採用

世界遺産

WORLD HERITAGE



富岡商工会議所は11日、富岡交差点(富岡市富岡)の改良工事に伴い、現在地から約50㍍西の旧吉野呉服店跡地に、2017年秋をめぐりに移転新築する新商工会館(仮称)の建設計画を

発表した。富岡製糸場のトラス構造のほか、柱がない大小の切り妻屋根が南北約60㍍に連続する細長いテザインで、西側に路地状の空間を設けてにぎわいの場を創出。製糸場の観光客や市民らが交流できる施設とする。

商工会議所は昨年3月、同店の土地約千平方㍍と建物4棟計約830平方㍍を取得。建物は地震による損

壊が激しいため解体後、蔵のイメージを打ち出して整備する。9月に着工し、1年かけて完成させる計画。テザイン会社のマルキンアド(同市)が総合プロデュースし、設計は手塚建築研究所(東京都世田谷区)の手塚貴晴さん(52)、由比さん(47)夫妻が担当する。新会館は木造2階建てで、延べ床面積は現商議所と同じ約千平方㍍を想定している。

手塚さん夫妻は、ドーナツ形の園舎で屋根の上を子どもが走り回る「ふじようちえん」(東京都立川市)の設計者として知られる。日本建築学会賞、日本建築家協会賞を受賞している。県庁で記者会見した貴晴さんは「製糸場へと続く南側は古い蔵のイメージを復元し、北側は未来につながるような建物にしたい」と説明。小堀良夫会頭は「過去から未来をつなぐ建物になる。次代を担う子どもも活用できる場にしていきたい」と話した。